

序文

本書は、私が昭和57年（1982年）から昭和59年（1984年）にかけて、一人で日本全国各地を巡って、「不戦のための自作詩朗読と講演会」をした、その講演の記録です。なぜ、そんな三十年近く昔の古いお話を本にして今頃出すのか。それは、その時の私の主張が今の時代相にピッタリ、いいえ一層ピッタリ適っているからです。つまり世界の様相も人の考え方も、三十年近く何一つ変わっていない証左です。

当時、1982～84年頃は米ソ冷戦下で、米ソ核戦争の危機が切迫していました。だから、卑小・無名詩人の私までが、命懸けで臆面もなく全国各地を廻り、地球人が生き残る不滅の真理〈不戦・非武装〉を説くため、詩朗読・講演会をやらざるを得なかった訳です。え？ 時代相は一変、急変した筈では？ 1989年11月にベルリンの壁が壊され、1991年にソ連邦崩壊し、ここに米ソ冷戦は終結。だから、世界対立の癌であったイデオロギーの対立が世界から消えたので、世は今や自由主義・民主主義を指向する、いわば平和と繁栄への一色の時代に変化したではありませんか。それに、世界からは植民地が

消失し、発展途上国もみな西洋近代文明の華である自由・民主・人権尊重の新時代へと舵をとり始めました。それと国連の存在、米の一極支配で世界の警察も安泰。それだから、世界をあげて平和と繁栄が歴史の前途に光のように見え隠れしていたのではありませんか。

いいえ、歴史は繰返す。またぞろ新しくテロ戦争の危機の発生、地球環境破壊の危機の到来、そして北朝鮮やイランやらの核戦争への危機。更に二十一世紀に入ってから中国の急速な突出で、米中二極化の危機？　いいえ、日本にとっては、一四〇〇年前の聖徳太子の時代の繰返し、中国に平伏するか、それとも日出づる国が自前の独立をはかるかの、決断の選択の岐路に立たされました。その象徴が東支那海の尖閣諸島対立の問題ですね。奇しくも、三十年前（1982年9月5日）に私は一篇の詩を書きました。それを次に記します。私の詩にはしばしば予言の詩があったりするものですから。

霧蜻蛉

ウイスン
呉淞の砲台から見ていると

ふしぎなことに

日本までが見えるのだ

一〇〇〇カイリもある東支那海が

血染めの日の丸になって

空に映っている

〈たしか一九九九年まではそのまま

決してはためくことはないが〉

ぜいたくになれきった日本人と

まだ貧しさからぬけきれない「支那人」の

馴れ合いの会話が洩れている

蘆溝橋や柳条湖^{*}の方は

遠くてここからは見えにくい

誰かが霧をまいているとしか思えない

ぼやけたまま 血染めの日の丸が映っている空に

今日は中国キリトンボ科の群が

無数の烈しさの祝宴の

真似をしている

* 柳条湖は満州事変(1931)の、蘆溝橋は日中戦争(1937)の、戦争勃発の引き金となった地名

さて、なぜ歴史は繰返すのか？ それは世界の対立を生むシコリを人間が持っているからです。それは単純な一事です。人類最大の罪は「戦争」、徒党集団を組んで人間が繰返す大量殺人犯罪ですから。その最大の被害者は戦争で死んだ人達です。世界の、すべての民族の、敵と味方。だのに性懲りもなく二十一世紀になってもエスカレートしてやっている。もしかして、一人が生き残って、すべてが死ぬまでやり続けるのかしら。なぜ、そんなバカなことをやるのか。それは自分の命と幸福は暴力(武器)でしか守れないと思っ
ているから。

それにしても、なぜ、こんな愚をホモ・サピエンス(知恵ある人間)がやり続けるのかしら？ この答えも至って単純。最大の戦争の被害者、死んだ人達の事を考えずに、生者

の幸福(救い)だけを計り考えようとするから。これは片手落ち。なぜなら、いのちは一つ(数えられないもの、数えてはいけないもの)なのに、生者の方の数だけを一生懸命に数えるから。だから片手落ち。「一個で全部、これが答え」、死者の言い分を聞きなさい。戦争で死んだ全部を生き返らせる方法を考えなさい。そうしたら、半分の生者の方も全部生き残れる。

その方法は至って単純。戦争を止めればよい。……でも、どうやってやめるの、止められるの? この答えも本当は単純なのです。「戦争反対」「核反対」反対反対の平和運動はいつまでも不毛です。これでは「核廃絶」にはえいえんになりません。平和の名前を呼べばよいのです。いのちは一つなのですから。

平和の名前を呼ぼう

平和の名前を呼んであげよう

平和の名前を呼ぼう

戦争反対 反対 反対では